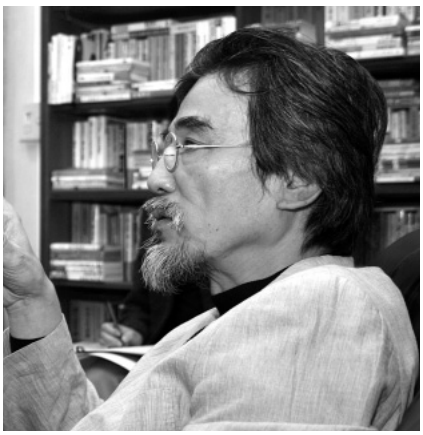
編集長インタビュー
編集されゆくグローバリゼーション

編集工学研究所所長 松岡正剛氏 featuring 中谷巌理事長

Editor-in-Chief Interview: "Ongoing Editing of Globalization" -Seigo Matsuoka, Executive Director, Editorial Engineering Laboratory featuring Director Iwao Nakatani

中谷巌理事長



松岡正剛氏

太下義之編集長

今回の編集長インタビューは弊社理事長・中谷巌も参加し、座談会のようなかたちで実施した特別版である。インタビューをお願いした相手は、日本文化研究者であり、編集者・著述家、そして編集工学研究所所長の松岡正剛氏。

松岡氏は、科学から宗教、芸術におよぶ多様な分野の研究に取り組んでおり、それらを「編集」して新しい知のあり方を創造しようという、いわば現代の「知の巨人」である。「現代の百科全書派」とも呼ばれており、同氏から知的影響を受けた人は多い（かく言う本誌編集長もその一人である）。

松岡氏は2004年から「日本文化の方法」を伝承することを目的とした「連志連衆會」（代表理事は福原義春・資生堂名誉会長）の理事として参加。多彩なゲストと対話をしながら、日本文化の未来を模索する「連塾」をスタートさせたほか、松岡氏を囲みながら日本文化の真髄を学ぶサロン「椿座」も開催している。

また、松岡氏は、毎夜1冊を取り上げる形式の書評サイト「千夜千冊」を2000年からWEB版で開始。さらにそれに大幅な加筆と構成変更を行い、全8冊の大型本として2006年に出版したところ、高額にもかかわらず初版を完売し、同年の出版界の事件として話題となった。

このような「知の巨人」松岡正剛氏を迎えた今回の編集長インタビューでは、グローバリゼーションが日本の社会や文化にどのような影響を与えているのか、そして、グローバリゼーションに対して、特に文化面において日本はどのように対応すべきなのかという点について縦横に語っていただいた。

This is the special version of the editor-in-chief interview. The person whom we requested for an interview is Mr. Seigo Matsuoka, an expert on Japanese culture, an editor and writer, and the executive director of the Editorial Engineering Laboratory. Our Director of Research, Iwao Nakatani also joined in, and the interview was conducted in the style of a round-table discussion.

Mr. Matsuoka is a so-called "intellectual giant" of the modern age, working on research in various fields ranging from science to religion and the arts, seeking to create the new direction for intelligence through "editing" them. He is also known as the "modern day encyclopedist" and many have received his intellectual influence (including the editor-in-chief of this Journal).

Since 2004, Mr. Matsuoka has been participating in editing as a board member in the Renshi Renshukai (Board Representative: Yoshiharu Fukuhara, Honorary Chairman of Shiseido Co., Ltd.), a social club that aims to carry on the "manners and methods of Japanese culture". There, he hosts *"Ren Juku"*, a seminar where he explores the future of Japanese culture through dialogues with various guests, and also *"Tsubakiza"*, a salon for studying the quintessence of Japanese culture along with Mr. Matsuoka.

In addition, Mr. Matsuoka has also been working on an on-line book review on a website from 2000 called *"Senya Sensatsu"* ('a thousand books in a thousand nights'), which introduces his review for one book every night. Upon considerable additions and changes in formatting, he published it in 2006 as a set of eight volumes of large-sized books. The first edition was fully sold out in spite of the rather expensive price and became the hot topic of the year in the publishing world.

In this editor-in-chief's Interview, we asked Mr. Matsuoka, as such an "intellectual giant", to freely discuss how globalization is affecting Japanese society and culture and how Japan should deal with globalization, particularly in the aspect of culture.

はじめに：グローバリゼーション3.0

太下　松岡さん、機関誌『政策・経営研究』のインタビューにご対応いただきましてどうもありがとうございます。本号では、「グローバリゼーション3.0」と題した特集を検討しておりますので、このテーマに即したお話をいただければと考えています。

さて、そもそも日本のグローバル展開を企業活動の面から見ると、歴史的に次の3段階に分けることができると思います。第1段階は、製造業による、モノの輸出を中心とした国際化。第2段階は、製造業の海外シフトが進展し、日本独自のきめ細かい「ものづくり」のノウハウを海外工場に移植することで国際競争力を維持・発展させた段階。このように第1段階と第2段階におけるグローバル展開は製造業から拡大していきましたが、現在は第2段階から第3段階へと移行していて、サービスや金融などさまざまな分野・業種において、人材やマーケティング等、経営そのもののグローバル化が必要な時代となっています。また、こうした情勢のもとで、国際的な法体系や制度、国際交流に関するインフラストラクチャー等が新たに設定・整備されて、いわば世界的レベルで“ゲームのルール”が否応なく変わりつつあり、企業や社会はこうしたことにも対応が求められる、新たな時代に突入していると考えています。

そこで、本特集においては、この第3段階のグローバリゼーションを「グローバリゼーション 3.0」と名付けてみました。ただし、この「グローバリゼーション 3.0」への日本の対応は、従来のような欧米の価値観やスタンダードへのキャッチアップが中心であったグローバル対応とは異なり、日本の強みや弱みを分析した上で、日本の価値観を世界に対して積極的に提案していく中で、新たな関係を構築していくべきであると考えています。本特集においては、こうした考え方に立って、「グローバリゼーション 3.0」に日本企業、さらには日本社会がどのように対応すべきかを模索していきたいと考えていますのでどうぞよろしくお願いいたします。

中谷　松岡さんは「日本のグローバル化」というテーマをずっと研究してこられたと思うのですが、古代における中国や韓国との交流から明治維新、戦後を通じて、それぞれの時代の“グローバリゼーション”に対しては、日本はそれなりにうまく対応してきた。それが現在に至る「日本」という国をつくり上げてきたのだと思います。われわれが持っている問題意識は、そのように過去はそれなりにうまく対応したけれども、これからやってくるグローバル化というのはちょっと違うのではないか、という点です。

特に私が持っている問題意識は、グローバル・キャピタリズムの動向にあって、このグローバル・キャピタルというものは、ファンドを始めとして巨大な力で、あっと言う間に土足で人の家の中にドドドッと入り込んできて、都合が悪くなったらパーッと帰っていくというイメージです。このようなグローバル・キャピタリズムによって社会の土台がどういう影響を受け、それが文化や精神にどういう影響を与えるのか、これが重要なテーマになるのではないかという気がします。もちろん、「日本は過去、黒船が来たりいろいろなことがあったときにも、大変だ、大変だと言いながらちゃんと対応してきたのだ。だから、日本の伝統というか、軸足の非常にしたたかなところを活用すれば何とか対応できるのだよ」という楽観的な見方もあるとは思うのですけれども、今日はその辺のところからお話を聞かせていただけませんか。

松岡　難問ですね（笑）。

ウォーラスティンからソフトパワーの時代へ

中谷　難問なのですけれどもね（笑）。まず、今まで日本が直面してきたグローバル化の局面と比べて、今直面しているグロール化というのは質的な意味で違うのかどうかという点についてはどういうふうにお考えですか。

松岡　それは歴史をどう見るかという根本的な問題にかかわるぐらい難しいと思います。日本だけではなくて、アジアとか北欧とか中東とか南米とか、世界全体を考えなければいけないと思うのですけれども、現状の世界で起こっていることはグローバル・キャピタリズムとともに高度情報主義の蔓延です。スーパーコンピュータが世界で均質なアウトプットを打ち出しているのではなくて、一見、世界のすべてのところにホストマシーンなき平等性というものがある。自由度も高い。そう思われているような高度情報主義ですけれども、この大きな波の中で今、日本の立っている位置がどうなるかということだと思います。

最初は私も、たとえばIMF体制とか、通貨問題とか、それから特にインターネットの急速な進展から見て、今回のグローバリゼーションは従来の波とは違うなというふうにいったん思ったのですよ。けれども、いろいろ頭(こうべ)をめぐらせてみますと、たとえば地理上の発見とか、ウォーラスティン[1]が影響を受けたような近代的な世界とか、あるいは植民地主義だとか、蒸気機関や無線やラジオとか通信とか、そういう各時代のエポックなことが日本だけではなくて各国にもたらしているもの、それからナポレオンなどがもたらした圧倒的な戦争力というようなものと、今日のグローバル・キャピタリズムというものを比べてみると、確かに今までとはちょっと違うという気はするのですけれども、そこから受けるインフルエンスや支配されていく「され方度」みたいなものには似ているところもある。したがって一方では、資本の暴力がウイルスのように浸透するという危険はある一方で、支配のされ方においては微妙であるように思います。

たとえば、完全に労働が支配されるとか、それから賃金が支配されるとか、あるいは政治が支配されるとか、軍事が支配されるとか、そういうようなかつての歴史の中で支配者たちや権力機構、そして列強諸国が持っていた支配のエンジンは昔のほうが強力だったし、強い拘束力であったと思いますが、それに比べて今日のグローバリゼーションはまだ余地があるのではないかと、私はそう思っているのですね。

そのひとつの例として、南米の最近の動向をあげることができると思います。1999年、ベネズエラのチャベス大統領の就任をきっかけとして以降、南米12ヵ国[2]のうち8ヵ国が反米政権になりましたよね。これに対してはもちろんアメリカの巻き返しが起こるとは思いますけれども、これまで全くそんなことが南米で起こるとは思えなかった。それが連続的におこっている。もちろん、何度も苦い目を体験しながらのことではありますけれども、10年弱の間に反米政権が8ヵ国まで及んだという状況を見ていると、グローバリゼーションと言われる中でも、まだちょっと余裕というものがあり得るかなという気はしていますね。

中谷　なるほど、それはすごくおもしろい、希望の持てるお話ですね。

帝国主義の時代にはある条件を満たせば強国は軍事力を使って他の国を侵略し、征服するということがグロティウス[3]の国際法以来、正当化される、言わば「力が正義」といった世界だったわけですね。

ところが現代世界を見ると、アメリカがイラクを攻撃して世界中の非難を受けたことからもわかるとおり、強国や軍事大国であっても、よほどの正当性がないと、あのような一方的なことをしてしまうと、かえって国際的に孤立する時代になった。これは情報化社会の進展とも関連していると思いますが、これが19世紀的な世界と現代世界の大きな違いであって、そういう観点から言うと、今おっしゃられたことは確かにそうかなと思います。確かに、言うことを聞かなければ軍事的に一掃しちゃうよという脅かしは効きにくくなっていますね。

松岡　先だって、中国がチベットに行った鎮圧行為についても同じですよね。国際世論が「ちょっとひどいじゃないのか」というふうにすぐ反応する。それで各国が聖火リレーを縮小した。

太下　ジョセフ・ナイのソフト・パワー論が多分そうい

うところから出てきたものだと思うのです。けれども、ジョセフ・ナイのロジックを読んでも、やはりまだ覇権主義の一形態としてしかソフト・パワーをとらえていないのかな、とも感じますので、逆に限界を感じてしまうところもあるのですね。

松岡　アメリカの場合、もとがもとなので（笑）、ソフト化してもそんなに変わらないのではないでしょうか。

太下　結局、軍事力のアナロジーとして文化を見ているというのがソフト・パワー論かなという感じがして、日本人がもてはやしているソフト・パワー論とは本来の意味はだいぶ違うように思います。

松岡　ナイのソフトパワー論よりも、大平首相の時代に首相補佐官だった長富祐一郎さんたちが、経済のサービス化・ソフト化、すなわち“ソフトノミクス”という考え方を提唱しましたが、この方がおもしろかったのではないですかね。

日本人のココロの三層

中谷　グローバリゼーションの視点からの企業活動に関する議論をみると、「日本は閉鎖的である」そして「閉鎖的なものの考え方で対応していると、グローバル・キャピタルが日本を避けてしまう」そして「新興国とか、もっと儲かりそうな国・地域へどんどん行くから、そうすると日本経済の活性化はないのだ」という見方をする人が圧倒的に多いですね。

しかし、そういう日本人の心の中は、ちょっと複雑なのではないか。これは山折哲雄[4]さんが言っていることですが、日本人の心の中は三層になっていて、普段、会社などで活動しているときは一番上の層で動いている。つまり明治維新以来の近代西洋合理主義、こういうものになるべく自分を合わせて行動する。しかし、問題が深くなってくると第二層目が顔をもたげる。すなわち、稲作文化に培われた共同体的な物の発想になる。さらにもっと深く行くと、今度は縄文時代の森林文化の中で育った感性という第三層が突然表に出てくると言うのです。実際、新聞やテレビに出てくる経済評論家とか、ああいう人たちの言い回しを聞いていると、「日本はもっとオープンになって、グローバル・キャピタルもどんどん受け入れるのが日本の生きる道だ」などと言っているのですね。

何％ぐらいの人がそういう意見かなというと、テレビに出てくるような人、特に経済関係の人というのは全部そういう意見ですね。ところが、それは多分その一人ひとりの頭の中で一番表層的な部分で物を言っているのだろうなと思うのです。実はもうちょっと掘り下げて、じっくり酒でも飲んでしゃべっているとどうなるかというと、第二層目とか第三層目の意識というのが頭をもたげてきて、「やっぱりそれじゃあ寂しいよね」という話になるのかなと思います。

松岡　それは日本が経済以外のことを国際的に発言していないからそうなるんです。別にグローバル・キャピタリズムだけで日本が追いやられたり、孤立したり、バッシングやパッシングされているのではなくて、さらにはナッシングだというところまで来ているわけではないのです。別に資本主義的な発言ではなくても、社会的、文化的、環境的、あるいは人間的な分野においてちゃんとしたことを発言をしていればそんなことにはならないはずです。しっかりしたロジックで発言していけばいい。

中谷　私はこのところ、ある著名な経済人と何度か論争したのですが、その人は「もう日本はどうにもならない」とか「自分が国際会議などへ行っても、みんな日本のことは歯牙にもかけていない」とか「日本は無視されてどうにもならない」といった超悲観論ばかりを言うわけですね。

海外のトップの人たち、政治家とか経営者とか、そういうエリート階層の連中と話をしていると、日本人は意思表示もはっきりしないし、戦略性もないし、国際社会で何を言いたいのかわからないとかいろいろな批判があって、「日本は何しているの」というふうに言われるのは確かにそのとおりです。しかし、外国に行って庶民層の人たちと話をすると、多くの人は、「日本

っていい国ですね」となる。日本は憧れの対象です。海外のエリート層の人たちはしたたかな思惑があるわけです。日本という国は、批判しておけば自分たちの都合の良いように動くと見ているから、日本に対して批判的になるのですね。庶民層の人たちと接触していろいろな議論をすると、「日本というのはすごい国だね」とか、「すごい文化もあるし、非西洋の白人の国で、よくあそこまで来れた、すごい、すごい」と、だいたいみんな日本礼賛論なのですね。ですから、決してそんなに悲観すべきことではない。

こういうことをくだんの経済人にお話ししたら、超悲観論だった彼が、その後、会うごとにだんだん態度が変わってきて、最近などは、「いや、『源氏物語』というのはすごいですよね。千年も前から女性があんなにすごい発想で人間関係をとらえて生活している。あのようなことを千年前に女性が書くなんて国は他に無いですよね」というふうに変わってきた。私は、「ああ、彼も意識の下の層が頭をもたげてきたのだな」と、まぁこういうふうに思った次第です（笑）。

日本文学の「ニュー・コンセプト」

松岡　近年、ジャパンクールとかクールジャパンとか言われていますけれども、まずヤバイというか、楽観できないことを最初に申し上げておくと、たとえば「文学」、それから技術はOKですけれども「科学論」、それから「哲学」や「芸術」も入れていいかな、こういった分野で、やはりちょっと世界に対する発信が弱いと思うのですよ。少なくとも私が読んでいる文学、哲学、科学の最前線ないしは新しい動向は少し小粒で薄いと思います。

たとえば『源氏物語』とか、あるいは20世紀文学をかたどったようなカフカ[5]でも、プルースト[6]でもジョイス[7]でもいいのですが、人間の存在というものを凝視したような作家を日本から輩出しているかというと、まだしてないですね。そういう意味では小粒であり、かつ、一言で言えば、すべからく私（わたくし）小説的になっていると思います。ブログ化していると言ってもいい。それは映画の分野も同様で、溝口健二や黒澤明を経た後、その水準にまで達していないという気がする。小林正樹とか、例外は何人かいましたけれどもその後はいない。

太下　「切腹」とか「上意討ち」という日本的な名画を撮った監督ですね。

松岡　そうですね。ほかに「東京裁判」とかね。それで、そういう状況を見ているとちょっと心配になる。ただし、これは日本の歴史、社会、文化の展開を見ていると、常にそういう戯作的な領域あるいは時代を経て、それから存在学的な目覚めを持つという、大きなうねりのようなものがあると思います。たとえば、江戸時代で言えば元禄的な、井原西鶴の戯作のようなものがありました。また、松尾芭蕉以前の談林派[8]というのはみんなショートバージョンなのですね。ブログ的だった。江戸というのは小袖にしても俳句にしても長いものをどんどんカットしてショートバージョンにしたわけですね。そういう時代があった後に100年たって、与謝蕪村とかが出てくるわけです。

つまり、ある時期を経過すると、さっきおっしゃった中層から古層に入っていけるわけです。そうすると、今、フィギュアのブームだとかアニメだとか、私小説だとか、超短編だとか、そんなものばっかりはやって困るなと私が見ているものも、日本の歴史の周期として見た方がいいのかもしれません。文化や社会をコンドラチェフ循環のように見ていいかどうかは別としまして、しかし、今までの流れから見るとだいたいそういう表層的な波があった後に深いものが出てくるというか、深いところへ届いていくというようなこともありますので、半分はちょっとまずいなと思いつつも、この後は深い本質的にものが出てくるのではないかと期待して考えています。

であるならば、こういう時期こそ「古層へ行こうよ」というようなことを、言い続けなければいかんと思うわけです。たとえば、儒学の日本化がまずは起こって、

しかし「単なる日本化ではやはり無理なのではないか」とか「さらにそれをもう一回再評価をするにはどうしたらいいか」というところで、国学が登場しました。国学というのは経営で言えば日本的経営のようなものですね。

具体的には、『源氏物語』の研究ですよね。まず賀茂真淵がやって、本居宣長がやって、そしてついにだれもが読めなかった『古事記』というテキストに、全40巻、30年にわたる挑戦をするということが起こったわけです。そのときやっと「漢意」（からごころ）を外せることになった。やはりそういう順番があるんだなとも感じますね。

太下　松岡さんは、日本文学を現状では高く評価できないというお話でしたけれども、2006年には、村上春樹が「フランツ・カフカ賞」を授与されていますよね。この賞の直近の受賞者がその年のノーベル文学賞も受賞していたので、もしかしたら村上春樹にもノーベル賞受賞の可能性があるのではないか、と噂されました。もちろん、国際的な賞をとればそれでいいかと言えば別にそういう問題でもないと思いますけれども。とはいえ、村上春樹という作家は単なる私小説の領域を越えて、おおげさに言えば日本の近代化、特にアメリカとの関係とそこからの自立そのものをテーマにしているようにも感じられますので、日本文学の中では極めて特殊な立ち位置だと思っていたのですが、いかがでしょうか。

松岡　村上春樹は『海辺のカフカ』（2002年）において、かつてドイツが抱えた民族的な矛盾をユダヤ人としてのカフカが描いていったもののうち、当時はわからなかったけれども、後から見えてきたようなうねりを描いているように思います。このうねりのようなものは、村上自身の中にあるものかもしれないですが、潮流として社会的なメッセージとしてとらえるところにはまだ至っていないと思いますね。

また、村上春樹だけではなくて、吉本ばななも中国やイタリア等で圧倒的に迎えられていて、そういう事

例は他に幾つもある。それから逆にリービ英雄のようにアメリカ人でありながら、プリンストンで万葉語を教え、自分が小説を書くときは大和言葉を使うというような実験をして海外でも評価されている人もいると思うのですが、でも、やはりちょっと数が少ないですね。

こういうアーティストが何人いるかということもあるのですが、もうひとつの問題はそのうねりが1つの層として日本人に「レセプション：受け止められたもの」になったかどうかです。それからもっと大事なことはこうしたうねりを通じて、「ニュー・コンセプト」が出るかどうかだと思うのですよ。たとえば、さっき申し上げたとおり、幕府による日本的儒学が失敗した次に出てきたものは、国学ともうひとつは「通」とか「野暮」とか「伊達」とか、今までだれも使ったことがない、「それ、なぁに」というような感じの「ニュー・コンセプト」なのです。これは最初は当時の日本人すら全くわからなかった概念でした。

ところがその後、それが日本人自身の生き方になり、たとえば深川芸者と神田のおにいちゃんの生（せい）の哲学、生きる哲学にまでなって、ついには「粋」となったわけです。さらに、九鬼周造に至ると、それ自体をハイデガー[9]やフッサール[10]や、あるいはベルクソンの哲学を通訳するツールに使ったわけです。ちなみに九鬼周造はフランス語の通訳をしてくれたサルトル[11]に、「あなた方の哲学では僕の気持ちはどうしても説明できな

いということがわかったから、おれは日本に帰る」と、それでパリから京都帝大に戻ってくるわけですね。それで「粋」しかないのではないかというようなことにまで至る。

太下　言い換えると、文化が社会的に昇華された時に、「ニューコンセプト」が新しい美学なり、新しい哲学にもなり得るということですね。

松岡　そうです。だから、もしも村上春樹の描くコンセプトがいずれはそういう新しい哲学になるとしたときに、じゃあそれを日本人自身が何と呼ぶか、どこまでレセプションするかということですね。ただし、それを「カフカ」と呼んでいるうちはまだだめだと思うのですよ。

太下　なるほど、「ニュー・コンセプト」には、新しい名称が必要なのですね。

松岡　そうです。そして「ニュー・コンセプト」として新しい概念が出てくるとともに、それが日本的な言葉で言うと「気質（かたぎ）」とか「段取り」とか「決め」とか「立ち居振る舞い」とか、そういった細部にまで一気に至るべきです。そういう動きはまだちょっと起こっていない。だからこそ、私はしつこく、「いや、可能性はある」ということで、まずエンジンの点火をしようとはしているのですけれどもね。だけれども、もうちょっと時間がかかるかもしれません。

ポピュリズムの読み直し

中谷　キリスト教の性格自体が「神・人間・自然」の階層性を持っているためだと思いますが、西洋社会は基本的に階級社会であり、悪い言葉で言うとエリートがいかに庶民をコントロールし、搾取するかという、そういう二枚舌の世界でずっと動いてきたように私には見えるのですが、日本は、階級社会的な要素が相対的に少なく、それに対して庶民の当事者意識が非常に高い社会なんですね。

だから、たとえば現場で働く大工がすごく繊細で微妙なことまでしっかり考えて仕事をする。こういう社会は、世界でも日本しかない。そういう歴史的に全然違う社会構造をつくっているので、外国人から表面的にはなかなか理解できない要素があると思います。つまり、財界人が外国へ行って、「日本は何やってるのか、何考えてるのかわからぬ」と言われるのはそういう社会的な構造の差なのですね。彼らはエリートとしていかに社会を牛耳るかという、そういう発想で物事を見ているのに、日本人のトップはそういう発想は余りないのですね。

日本のトップ層は自分も中間層のちょっと上にいるぐらいであって、庶民と一緒に歩むのだという、こういう感覚はものすごくユニークだと思います。

松岡　だからこそ学者や経済界のトップたちは何を考え直さなければいけないかというと、メディアを含めて「ポピュリズム」というものについて、もう一度日本的な解釈を組み替えてでも考えなければいけないと思うのです。

今までは、オルテガ[12]やリースマン[13]が提案した大衆とか群集というようなものを前提にして「ポピュリズム」という概念を私たちは見ていますよね。今のメディアや大衆の占拠の仕方を見ると、確かにそういう面もある。あるけれども、今言われた大工さんたちのようにサイドウォーカーとしての庶民というものを日本は輩出し続けてきたわけですね。それはポピュラーな中にいるわけです。かつて世界の美術界に影響を与えた浮世絵が生まれたり、あるいは俳諧が生まれてきたわけですが、当時はだれも有名でも何でもない。現代で言えば、Ｊポップの中にいたり、漫画の中にいたり、秋葉原にいたり、そこここで才能や達人が生まれているような感じです。そして誰も「エリート」ではないわけですね。となると、やはりシンクタンクやメディアや学問が今から見いだすべきは、この「ポピュリズム」とおぼしきものの中に潜んでいるわずかなずれや発露やエマージェント（新興）、創発というものに着目することなんです。そこに新しい様式の萌芽があったり誕生があり得る場合にその支援をしたり、評価をし

たりしていくべきで、ひいてはアジア的な大衆性というものを読み直していかなければいけないのではないかと思います。これは学問の分野がまずやらなければいけない。

先ほど、日本人の三層について言われたわけですが、それだけではなくて、21世紀におけるアジア的、日本的大衆構造、正確に言えば社会構造ですね、これが今までのドイツ型のゲマインシャフトやゲゼルシャフトでもなく、あるいはオルテガやリースマンの言う大衆論でもなく、それからまた愚民と支配者というような階級意識でとらえるものではなくて、何か新しいコンセプトがここにあるのではないかと思う方がいいのではないかと思うのです。こうした読み直しを通じて、たとえばヤクザであるとか、あるいは網野善彦[14]さんが研究された「供御人（くごにん）」[15]とか「神人（じにん、じんにん）」[16]というような普通の社会史や世界史ではとらえがたいような役割があらためて浮き彫りになってくるのではないでしょうか。

日本には昔から「別所」とか「散所（さんじょ）」とか「別院」とかというふうに名付けられたセクターがありました。これらはメインではなく、サブセットです。ところが、ほとんどの日本の宗教、社会、文学はその別院、別所、散所というサイド（脇）から生まれているわけです。もっと言うと、表千家と裏千家のように、なぜ「表と裏」みたいな言い方をするのかというような、不思議な表現の中に実は新たな伝統、言い換えるとニューウェーブが生まれる可能性があるわけですね。そうすると、元へ戻ると、「ポピュリズム」そのものも考え直す必要があるかなということになる。

中谷　おもしろい見方ですね。日本人はオルテガ等に過度に毒されていて、西洋的な社会構造を通じて日本自身を見てきたけれども、日本の強みはむしろ「ポピュリズム」の中に隠された秘密の箱みたいなものがあって、そこからポッポッと何かが出てくる、それが日本の文化とか社会の発展の非常に大きなエネルギー源であったという見方はまだ誰もしていないのですね。

松岡　ついついオタク論の方に傾いてしまうからですね。

中谷　それは明治以来、西洋的な発想で教育を受けてきた日本人がなかなか気づけない部分かなと思います。しかも、それが日本が西洋から理解されない部分なので、やはり自分たちの持っている力というのは何かというのを今おっしゃったような文脈の中でもう一回捉え直して理解し、その上でもう一回西洋の二枚舌的な構造というのですか、それを眺めると、非常に世界の構造が見えてくるかなと思いますね。

松岡　ユダヤ人国家としてのイスラエル建国のときなど、イギリスなんて、バルフォア宣言をふくめて三枚舌でしたからね。

中谷　そうですね。それで世界を征服した。

オーガニックな組織形態が必要

中谷　グローバル・キャピタリズムという思想、あるいは民主主義という思想は、西洋のエリートが社会を支配するためのツールとしてつくり上げてきたと考えることができます。だから、表面上は、民主主義は「皆さんの意見を吸い上げて意思決定します」となり、またマーケットメカニズムも「一人ひとりが自分の意思で自分の効用を最大化するようにお金を使います」となり、企業は「利潤を最大化します」となるわけで、それについては「もう何も文句を言うことはないでしょう」となるわけです。こういう非常にきれいな体系をつくりあげてしまう、その才能はやはりアングロサクソンはすごいなと思うのですけれども。

松岡　そうです、それには日本は負けました。

中谷　ですから、日本人的な視点から言うと、グローバル・キャピタリズムや民主主義制度などはエリートが社会を支配するためのツールだという見方をすべきですよね。この二重構造的な部分を日本人はちゃんと見極めなければいけないと思うのですね。実際、最近起こったサブプライム問題などはまさにそれを露呈したと思う。サブプライム問題の本質とは、金融工学の手法とレトリックをうまく使って、本来なら借金できそ

うもない低所得者層にまでローンや金融商品を大量に買わせて、それで金融資本がどんどん膨らんで、あげくの果てにバブル崩壊となった。

言ってみれば、世界的な金融資本というものは、マフィア的な人的ネットワークの構造をつくって、内部情報を活用して大儲けしてきたわけです。大きな金融取引の儲け口を一緒に創りあげるとか、あるいはサブプライムみたいに何もないところから有を生み出して大儲けをするとか、マーケットメカニズムという美名の下に隠れている、人的ネットワーク構造の中で、彼らは金融界を支配している。そういうことに日本人は気がつかないで、「日本の金融機関は何で海外の金融機関と同じように、グローバルに出ていけないのか」などと言っているわけですね。

でも、それは違うぞと思います。日本人にはそんなことはできないのです。西洋のエリート階層のようにしたたかではない日本人は、基本的に「真実一路」を旨とする「一枚舌の世界観」を持っているから、西洋人のようにはなれないですね。だから日本人にできるとしたら、東南アジアに進出していって、そこで庶民に役に立つような小さな融資をこつこつ地道に提供することなのではないかと思いますね。それによってアジアの信頼感を積み上げていく。それが日本の金融機関がグローバル化する方策じゃないのかというように思いますね。

こういう観点が多くの分野について言えるのではないか。今までおっしゃっていたような日本文化の強さみたいなものがもしあるとしたら、西洋的な階級化から生まれてくる二重構造によってではなくて、みんなが参画できるような「一枚岩」の構造から出てくるのだと思います。「ポピュリズム」に見える大衆的社会の中から、ときどきすばらしい発想の庶民が出てきて、「えっ、おまえ、こんなこと考えついたの」というようなことが、新たな日本的文化の創造につながっていく。こういうふうに考えたらいいのでしょうか。

松岡　そうですね。ほぼ近いですね。ただ、言い方としては「一枚岩」と言うよりは、私はネステッド（入れ子）でいいと思っているのですよ。

中谷　ネステッド、なるほど。それはどういうものですか。

松岡　ちょっと離れて見るとひとつに見えてもいいのですけれども、もうちょっと観察をするとそこは入れ子型であるような“しくみ”ですね。もうちょっとわかりやすく言えば、マーケットメカニズムに対するに、マーケットオーガニズムということでしょうか。

やはりメカニックなグローバリズムに対してオーガニックなグローバリズムというものを日本は提案すべきだし、また持っていると思うべきだと思います。じゃあ、そのオーガニックというのはどこがどうなっているかというと、たとえば組織について言うと、企業とか、官僚組織とか、政治組織、あるいは社会の庶民の組織でもいいのですけれども、日本にはピラミッド型は合わないのですよ。したがって、ルールはちょっとややこしくなって、そこに工夫が必要なのですけれども、やはり入れ子型でオーガニックな組み合わせ型であるのがいいんです。

たとえば、江戸時代の例で言うと、天保の改革で台無しにしてしまう前までの大阪堂島の「株仲間」というものに私は注目しているのですけれども、これは今日のどんなマーケットメカニズムが生んだ、あるいは金融組織論が生んだものよりも私はユニークで、動的で、有機的であると思っているわけですね。

太下　この「株仲間」では、世界で最初の先物市場をやっていたのですよね。最近出た『堂島物語』[17]という小説でも紹介されています。

松岡　そうです。先物市場の世界初の、先駆的な例ですね。しかも、その責任の取り方、相互監視の仕方、それから自主的なシュリンクの仕方、いろいろ独特なものがあった。それから組織においても、「結（ゆい）」とか「講」とか「座」とか「社」とか「連」とか「組」とか、こういうようなものをうまく組み合わせて、一つひとつ目的とスケジュールとメンバーシップを持たせて全部

使い分けていた。これらすべてを現代で言う「株式会社」というふうに一律にみなしていこうとすると本来の日本には合わないのですよ。

だから、「株式会社」は株式会社として、もうこれはグローバリズムの中に組み込まれてしまったら別に構わなくて、別に新しい株式会社法とか会社法とかが欲しいと言っているわけではないのですけれども、それ以外のものをNPOだけにしないで、プロフィッタブルでかつ公共的であるものとか、あるいはある時期でやめる期限付きの組織（たとえば講というのはある目的が果たせれば解体していいわけですから、そういうものなのですね）とか、そういうような新しい組織形態を持つべきでしょうね。逆にいえば、無から始まって神がいて、永遠に成長が続くという自己進化的、千年王国的、一神教的なパースペクティブを持った欧米的思想だけでは、日本はうまくいかないわけです。

たとえば、遠近法も「三遠」と言って、「高遠」と「平遠」と「深遠」というのですが、見上げた像と水平に見ている像とのぞき込む像との3つを描いたのが水墨山水画となるわけです。そして、それを取り込んだのが日本の山水画ですし、それをさらににじみだけに変えたものが長谷川等伯[18]の「松林図」のようなものですから、普通の一点透視型のパースペクティブではああいう表現は生まれてこない。というようなことを考えていくと、組織や会社や働き方や価値観そのものにも、一点透視型ではなく、自己進化的なものではない視点というものがあってもいいと思いますね。それのまだ準備が現代の言葉ではでき上がっていないのですね。

太下　言い換えると、「ニュー・コンセプト」が新しい言葉で表現されていないということですね。

松岡　まだされていないですね。それから、それのための組織形態とかを生み出すためのテスティングとか提案とか、それをちゃんと法で許容しているかというとまだ足りなさすぎますね。もうちょっとそれを制度化もした方がいい。さらに言えば、多様なドメスティックルールをもっとつくらないとだめだろうと思います。

新しいコモンズの発見

太下　先ほど日本的なポピュリズムのお話が出ましたが、たとえば連歌の場では、公家や武士や庶民が身分に関係なく、全体のルール（いろいろな細かなルールがあるというのは松岡さんの著書にも出てきますけれども）の中で、先の人が詠んだ句を継いで、そこに自分が新たに創作する部分を加え、それによって全体として新しい創作が行われるという特殊な構造を持っています。恐らくこういう創作形態というのは世界にも例がないような特殊な形態だと思うのです。さらに言うと、俳諧についても、本歌取りというかたちで先人の句を生かす形で新しい創造行為が行われるという、これも極めて日本的であり、世界的に見ると特殊な創造行為があります。

一方でグローバリゼーションとの関係で考えますと、最近では知的財産権とか著作権が非常に強化されていくというアメリカ流の考え方が主流となってきており、これに対して、日本の俳句界でも俳句の盗作論争などということが起こっていて、要は本歌取りという作法は一種の盗作ではないかという、ある意味で残念な議論もあるようです。しかし私はむしろ本歌取りというのは先ほどの「ポピュリズム」の作法というか、極めてすぐれたコモンズの作法であると考えていて、この作法のあり方に、もしかしたら21世紀の新しい文化のヒントがあるのではないのかなと考えているぐらいなのですけれども、松岡さんはいかが思われますでしょうか。

松岡　そう思います。それは言い換えるとこういうことなのですね。さっき中谷さんもおっしゃったような、支配層とかエリートだとか権力機構とその中にある個という対応関係が欧米社会を確立でき、さらに言えば一神教をつくり上げたわけです。ところが、アジア的・日本的社会の特色は、個はあるのですが、個が社会化していくときには「場」ないしは「仲間」という

オーガニックな組み合わせで創発を起こすわけです。したがって、オリジナリティは個にもちろん芽生えるけれども、その発生は今言われたコモンズ、すなわち場、界隈、座をもってオリジネーション（創作）を生んでいくわけです。この「場」の単位を今日、新たに発見しないとだめです。

それは工場とか、部門とか、部署とか、あるいはある職能で見つけてもいいし、地域で見つけてもいいし、学校や家族よりもちょっと広い、たとえば近所のようなもので見いだしてもいいのです。ネットワーク・コモンズもありうるでしょう。ところが、こういう場というものは曖昧な境界線しか持っていないために、今日の社会科学的な見方では、この曖昧領域というものを設定する概念や科学が欠けているわけですよ。しかし一方では、カオス論やフラクタルなものやさまざまな複雑系も出てきたがゆえに、もともと領域の設定がかなり困難な分野の科学だって生まれているわけですね。

だとすれば、その境界設定がたとえば動的で動き続けるとか、常に曖昧領域を持っているとか、必ずしも初期条件の代入だけではその組織や物質系のシステムの成長を物語れないとかというような新しいモデルを考えていけば、そこに新たなアジア的・日本的な場の理論というものや、創発の理論や、オリジナリティがある組み合わせでで き上がるのだと思います。これを連歌的に言えば、付合（つけあい）[19]とか本歌取りとかというのが全部入ってくるのではないかと思うのです。

そうすると、個の見いだし方を否定するわけではないのですが、この「個プラス組み合わせ」というようなもうひとつのモデルが生まれる可能性があって、それはかつてのコミュニティやコモンズやゲマインシャフト、ゲゼルシャフトでもなく、それから大衆というふうに一挙に海のようにそれを投げかけて戻してしまうものでもなく、中間的な“動く単位”というものがそこに出現してくるのではないかと思うのですね。それを、ネグリ[20]のように「マルチチュード（Multitude）」と言うことも可能でしょうし、あるいは革命論的に言えば「ゲリラ」と呼ぶこともできるかもしれないけれども、そういうラディカルなものももちろん入ってもいいのですが、もうちょっと楽な、おもしろいものをイメージしたいと思います。先ほどの結、講、座、連、社、組というような幾つもの緩いコモンズですかね。

太下　ほかに「もやい」とかという言い方もありますね。

松岡　ただ、ここでひとつ大事なのは、こういう緩いモデルがいろいろ動き出すわけですから、グローバル・キャピタリズムやアジアや日本国家という大きな枠組をまたいでいくことになるわけですね。そうすると、これらのグローバル・セクターをまたいでいく時の「ゲート」がどうなっているかという点が大事なポイントになります。

では、このゲート感覚が日本人にはないかというと、そうでもないんです。かつて日本の社会というのはこのゲートもうまくつくっていた。たとえば、関所を越えるというのはある資格が全部条件が整えば越えられるというふうになっているのではなくて、このステータスの人はこの条件を満たさないとだめ、このランクの人はこの条件を満たさなければいけないけれども、この程度のものは適当にパスしてもいいとか、粗い目と細かい目と、それから低いハードルと高いハードルというのを幾つも用意していたわけです。さらに実は関所以外のゲートもあるのだとかというふうに、ゲートそのものも緩かった。つまり、場のモデルが緩くなるということは、ゲートウェーの方も多様化しなければいけないということなのです。これはグローバルなルールからすると非常にわかりにくいので、まず日本が提案し、実験をしてどこかで成功をおさめる必要があると思います。

中谷　いや、それはすごくおもしろいですね。グローバル・キャピタリズムは軍事力などと質がちょっと違うのですけれども、やはり暴力的な側面がすごくあって、今おっしゃったような境界の曖昧な場づくりとか、そういうものに対してはすごいアンチテーゼになってい

るのですね。

松岡　そうですね、排除的ですよね。

生産と消費の間のプロセスを多様に

中谷　昔、国境あるいは社会の壁というものがしっかりあったときは、その枠の中でみんながそれぞれ棲み分けをしたり、お互いに協力し合ったり、調和したりしながら、何とか楽しくやっていこうよということでやっていたわけです。特に日本という四方を海に囲まれた社会はそういう社会だったと思いますけれども。ところが、そのときにはたとえば経済活動をとってみると、生産されたものはその社会とか国という枠の中で売り切る必要があった。ということは、庶民もちゃんと購買力を持っていなければいけないわけです。そして、ちょうど生産と消費が均衡し循環するという構造ができあがると、そういう枠の中ではみんなお互いに協力し合いながら、今おっしゃったような場とか、入れ子の構造みたいなものをつくる余地があったと思うのですね。

ところが、グローバル・キャピタルの怖いところは、オープンシステムだから、社会単位や国家単位で生産と消費が均衡する必要がないということにあります。たとえば中国のように、ここは労働コストが安く、生産に適しているとなったら、大量にそこへ生産拠点を持っていくわけですね。そして、大量につくられた商品は、別に中国大陸にいる庶民が買わなくてもいいのです。それらの商品は安い生産コストでできますから、世界中が買ってくれるのです。だから、かつて生産と消費が一体化していることによって一種の共同体、あるいは入れ子構造みたいな複雑な構造が可能になっていた世界が、生産と消費が完全に分離されることによって、社会が分断されてしまった。多くの国・地域が暴力的な影響を被っているわけですね。そういう悪影響が今、日本にも出てきた。

かつて日本的な伝統の中では生まれてこなかったようなまずい現象が起こっているのだと思います。そのように生産と消費が分離されることによって、たとえば学校を卒業するタイミングですぐに就職しなかったら、ずっとネットカフェを渡り歩かないと生きていけない世界とか、はっきり言って二極化といいますか、格差というものを平気でつくり出せるような社会になってしまったのだと思います。これが日本文化や日本人の精神構造にじわじわと目に見えない悪影響を与えているのではないかと思います。こうした負のパワーは軍隊とは全然違うものだけれども、社会を壊す可能性がありますので、ここのところは何とかする必要がある。

私はグローバル・キャピタリズムによって切り捨てられる人たちを座視するのではなくて、日本の社会はこの人たちを徹底的に救うべきだと思います。というのは、日本はそういう庶民層の当事者意識の高さで持ってきた国だからです。アメリカのように、5,000万人もの国民が健康保険も入れないで、病院にも行けないというような、そういう世界になってしまうと、日本という国の良さは消えてしまいます。国家は何をすべきかというと、道路族に翻弄されるのではなくて、善意で生きているのに気がついてみたら病院に行くこともできないというような、そういうことが起こらないような基本的な社会構造をしっかりとつくって、その上でグローバルにどう闘うのという話をすべきではないかと、そういうふうに思っているのです。

松岡　おっしゃるとおりです。ですから、生産と消費の間のプロセスの組み立てをもっと複雑で多様にすべきだと私は思うのですね。生産と消費の間にサービスとレシーブの両方が実はあるわけですから。それを生産と消費がグローバル・キャピタリズムのもとで直結して、そこに入れないものははみ出すに任せるのではなくて、間のフィルターを多様にして、もっと多様な組み合わせが可能な状態をつくっていくべきですね。さっき申し上げた別院とか別所だとか、散所だとか、縁とか公界（くがい）とかもみんなそうなのですが、かつては普通の社会からあぶれたとしても遊女も難病者も失業者も、

それなりの単位のコミュニティ等に属することができたわけです。

今、それがグローバル・キャピタリズムの中で見えない圧力によって全部はじかれていくわけですが、それに対して、自主的な組み合わせがプロセスの中で起こるような仕組みを発案すべきだと思いますね。今の日本にはこういうことが足りない。だから、今、山谷とか釜ヶ崎というものがクリーンアップされ過ぎていて、むしろ海外の安宿を求める連中が全部来ていますよね。

太下　お台場で「コミック・マーケット」が開催される時などには、海外からバックパッカーが多数、山谷の簡易宿泊所に来て泊まっていますよね。

松岡　そう、バックパッカーが入り込んでしまったでしょう。彼らの方が頭がいいなと思いますけれどもね。今の日本には、そういった小振りの単位が少なすぎますね。日本人がそういうようなものを、上も下も中間層も忘れているので、もう一度思い直すべきですよ。

太下　先ほどの「場」の理論にも通じる考え方ですね。

松岡　「座」にも通じますね。

逸脱した評価軸を

太下　ちょっと話は飛んでしまいますけれども、私は今、東京都の文化政策の委員を仰せつかっておりまして、その中で検討しているひとつのテーマが、「オリンピックの文化プログラム」なのです。これは2016年に東京がもう1回オリンピックを招致しようという活動の中に含まれるものですけれども、何でオリンピックで文化かというと、もともと「オリンピズム」というものは肉体と精神の健全性が大事であるということで、実はオリンピックの開催の当初には芸術のコンテストもやっていたという歴史もあるのです。そして、北京オリンピックの次の開催地である2012年のロンドンの大会から、「文化プログラム」をIOCが非常に重視するという方向に大きく転換したのですね。

ですから、2016年のオリンピックを東京が本当に招致しようとした場合、どのような文化的なチャレンジに関する新しい提案ができるのか、というところがポイントになるのです。ただし、ここで言っている文化というのはもちろん文化的なフェスティバルとか、そういうイベントのレベルの話ではなくて、開催国として文化の振興に対してどのような新しい提案ができるかということを意味しています。たとえばロンドンですと若者に徹底的にスポットを当てて、若者がどういうふうに文化と出会えるかという、今までも実はやってきたし、本当はもっとやりたかったことをオリンピックにかこつけてうまくアレンジしているのです。

かつての1964年のオリンピックのときには、東京の町はハード面で大きな変貌を遂げたわけですけれども、2度目に開催するときには、ハード面の変貌はもはや必要はないと思います。むしろ文化的・精神的な部分でどのようにオリンピックをうまく活用できるのかという実験の場になると思うのですね。もし、こういうお題があったとして、松岡さんとしてはこんなことをチャレンジすればおもしろい提案になるのではないかというようなアイデアがありましたら、ぜひお聞かせいただきたいのですが。

松岡　ジャンル的なことはいくらでもあると思うのですね、たとえば音楽をどうするかとか、芸能をどうするかとか。もちろんそういうこともあっていいのですが、しかしそれよりも、さっきの粋や通や伊達ではないのですが、エバリュエーション（文化や概念の評価）のコードとモードを新たに東京ないしは日本がつくり上げていけばいいと私は思う。そういうような評価の概念、それからそのテースト、そういうものをもっともっとつくり出すといい。

たとえば、水墨画では「神品（しんぴん）」、神ですね、それから「能品（のうひん）」、能力ある才能、それから「妙品（みょうひん）」、もうたとえようもなく、いわれもなく美しいとかすばらしいということですね、これがメインとなる3つの価値観なのですが、それにもうひとつあえて「逸品（いっぴん）」という価値観を加えているのですよ。この逸（そ）れているという価値観を

入れて評価する。実は、この「逸品」という価値観において、日本は中国の水墨画を凌駕してしまったのですよ。それが大雅[21]とか等伯[22]とか玉堂[23]とか木米[24]とかにつながっていく文人画の系譜です。普通、評価というものは上位3つと言っても、ベスト30と言っても、メインとなる基準で組み立てますが、この「逸(そ)れる」ということに対する評価においては、そこに入らないものというのを日本では評価の対象に入れてきたわけですね。たとえば、こういうようなものを東京オリンピックで見せることができると面白いと思います。

逸れたものとは、つまり逸脱の価値みたいなものですね。軌道から外れるものの価値、それをヨーロッパではコリン・ウィルソン[25]以降、「アウトサイダー」と呼んで、ランボー[26]とかドストエフスキーとかニジンスキー[27]とかに光を当ててきたわけです。一方、日本的なものを見ていると、アウトサイダーというよりも、それこそがインサイダーとまでは言わないけれども、次の時代のビジョンを提示している、という面もあったのだと思います。

中谷　逸品の「逸」というのは逸れるという字だけれども、今の日本語では、それはすぐれたものであるという意味ですよね。

太下　逸れると言うよりは、むしろそちらの方が本流であるわけですね。

松岡　そうです。たとえば「さび」とか「わび」も逸れている、逸脱した評価なのですね。たとえば、侘びるというのは、お詫びしたいぐらい何も物がないということですね。それから、寂びるというのも、もう何か廃れているという意味でしょう。ところが、それが「侘(わび)」、「寂(さび)」というニューバリューになったわけですね。それから「はかない」という言葉もそうです。「はか」というのはものがはかどる単位のことを「はかどる」とか「はかがいく」というふうに「はか」と言うのですが、それがないというのはもう全然だめということですね。にもかかわらず、「はかなし」という価値もあるのだと言っているわけです。ある意味では「無い」が「有る」みたいな矛盾した表現ですよね。

かつての日本では、そういうような価値観をつくり得たわけです。21世紀で東京のようなメガロポリスがこれだけ有象無象なものを持っていれば、いろいろなものがその中にあるわけですから、そういうものに新たにラベリングができるような価値観の創造や評価というものもやってほしいと思いますね。

太下　まさに「ニュー・コンセプト」の確立のような話ですね。

中谷　おもしろい提案ですね。少なくとも一神教的な発想からはこのような考え方は生まれてこないのではないでしょうか。

矛盾した価値観をひとつに

松岡　ある時、アサヒビールの樋口廣太郎さんから、「『スーパードライ』という旨いビールをつくったのだけれども、これをどういうメッセージで売り出すすべきか」と相談された時に、私は遠州[28]の「きれいさび」のように、矛盾した、葛藤したコンセプトをつくった方がいいと提案して、その結果、「コクがあるのに、キレがある」というキャッチ・コピーが生まれたわけですね。

「きれい」と「さび」というのは普通合わないですよね。それは矛盾した価値観です。これと同じように、ビールの専門家からすれば、「コク」と「キレ」というのは闘い合うもので、「コク」と「キレ」が同じであるわけがないということなわけです。

私は、そうした矛盾した概念がひとつになっていくことによって、その間に何とも言い得ない、名状し得ない、新たな価値観が生まれてくるのだと考えています。それを今までは中間とかアンビギュイティ（両犠牲）とかいう言葉で言ってきたけれども、もう少しそこに積極的な価値を提案すべきではないかと私は思います。

それからジャパン・バッシングが激しかったころ、ホンダの久米是志さんに「これからのホンダはどうい

うメッセージを発信していくべきか」と相談されたこともあるのですが、結論を言うと「F1に勝って、地球にやさしい」と発信すべきだというふうに私は言ったわけです。これも普通は、どっちかですよね。ある時期はまず「地球にやさしい」で行きましょうとか。だけれども、私はデュアルメッセージとか言っているのですけれども、この強力なデュアルなメッセージに切り換えて日本は「ニュー・コンセプト」を打ち出すべきではないかと提案したのです。

それを、「えっ、何、コクがあるのに、キレがある」とか、「えっ、F1に勝って、地球にやさしいなんておかしいじゃない」と言わせないぐらいのスピードで打ち出すべきではないかと思いますね。

中谷　それはすごくおもしろいのですけれども、私が興味があるのは、いったいどうして日本にそういう発想や感覚というのが生まれてきたのかのかという点です。この根源をわれわれが押さえることができれば、グローバルに展開する力となるような気がするのですね。というのは、やはり一神教の世界というか、西洋型の社会というものは二項対立の世界でＡかＢかと言っているわけですね。ところが、日本は、それはちょっとおもしろくないよ、やはりＡもＢもであり、両方絡めてそこからまたＣをつくり出せるのではないのという、そういう発想なのですよね。ただし、経営学などをやっていると、こういった話が一番理解してもらえないのですよ（笑）。

アメリカや外資系企業から見ると、「何だ、日本は」となってしまって、そこで「日本はだめだ」という論の方につながっていくわけです。でも、日本的な逸品の話ではないですけれども、ちょっと外れた考え方のところに光を当てると、ものすごくおもしろいものがそこに根付いている。そのことが見えてくるはずなのですね。ただし、まずそれを説明してもなかなかわかってもらえないのです。ですから、何で日本人がそういうふうに物を考えるようになったのか、そういう感覚を持つようになったのか、その根源的なところがつかめればある程度説明できるようになるかもしれないと思うのですけれども、いかがでしょうかね。

松岡　日本が「うつろい」が多い国だということでしょう。やはり海に囲まれた列島であること、それからモンスーンがあること、四季があること、地震のようなフラジャイルな構造を持っていること、木や紙で家を作ってきたこと、等々いろいろなことがベーシックにあると思うのですね。これらが日本をそもそもうつろいやすい国にした。しかしそうであるにもかかわらず、なぜＡとＢという二分法以外の価値観を日本人が持ち得るかというと、「差し掛かる」とか、「渡り」とか、「中途」とか、「道中」とか、「道行き」とか、プロセスの中にもうひとつの価値、すなわち第三項があるということがおきてきたからです。大澤真幸君的に言うと「第三者の審級」[29]ということですかね。

たとえば『伊勢物語』が典型的ですけれども、実はあの話には伊勢の話は何も出てこないんです。東下りですから、じゃあ江戸の話があるかというとそれもなくて、全部道中なのですよ。プロセスだけです。

そして、ほとんどの歌舞伎も『落窪物語』等の多くの物語も、そのプロセス、道行き、渡り、能で言う「橋がかり」のところに実は第三番目の価値というものを新たに生まれるように設定しているんです。

一方、日本人はそもそも日本語が文字、フォントを持っていなかったため、縄文、弥生の長い間にわたり、文字を使わないで頭の中で全部の言語表現とかイメー

ジ表現をしてきたわけです。そこへ漢字というフォントがやってきたのですが、英語のように表音文字として漢字を受け止めたかというとそうではなく、読み方を頭の中のものに当てはめて、漢字を二重、三重に読んだわけですね。たとえば、「松」というのは「song」と読まないで、縄文以来に持っていた読みである「まつ」をこの字に充てた。すでにそこで領域が第三番目に拡張しているわけです。本来は単一的な要素であるはずのフォントにおいてすらイメージが組み合わさって、空間や時間の「うつろい」「流れ」「渡り」「経過」というものにはみ出していった。

日本においての宗教も同じです。仏教が入ってきて、かつての多神・多仏が融合したわけですが、その結果、新羅仏教でも唐の仏教でもない、氏族ごとの仏教というとんでもなく日本的な仏教にしてしまったわけですね。でも、氏族ごとの仏教などというのは韓半島にも中国にもないのですよ。お家ごとに宗教が違うみたいなものですから。このように、曖昧と言えば曖昧な、もうちょっと言えばホロン[30]的な単位と言いますか、そういう移行しやすい単位をいろいろもってきたんです。こうしたことが、プロセスにおいて第三番目の価値観が発生し得る余地を持ったということにつながった。これらは、私は日本の根元の部分に最初からあったもののように思いますね。

サブジェクトとオブジェクトの間

中谷　それと関連をするのは「個人主義」の問題です。西欧社会は、歴史的に見て基本的に拡大主義だった。たとえば帝国主義の時代には、ヨーロッパの中でフロンティアがなくなったらアフリカに領土を拡大した。アメリカという国ができると今度は西部開拓をやった。スペイン人は南米を征服した。こういう世界では「個人主義」が定着しやすい。フロンティア開拓のためには、他人のことはともかく、「個人が自分の主張を強く出せ」そして「自分の思うとおりやりたいことをやれ」となるわけです。そうでないと、フロンティアというものは開拓できないわけですね。

ところが、日本は「どんづまり」の島国の中で、みんなで知恵を出し合っておもしろいことを見つけていこうよという話になるので、それぞれに個はあるのだけれども、「拡張主義的な個人主義」というのは成立しなかったのだと思います。だから、先ほど連歌の話もありましたけれども、みんなで掛け合いながらおもしろいことを見つけていこうよとなり、そういう発想の中で言うと、自分はAであなたはBで、じゃあどっちが強いのかというAorBの発想ではなくて、それをうまく取り持って第三のCをつくろうよという感じなのだと思います。

そういう意味では地勢学的に日本が海に囲まれて外国の侵略をも受けずに、その中で純粋培養されてきた縄文時代以来のDNAがすごく複雑に絡み合って熟成されてきて、それが逸脱した文化現象というものを生み出した。それが実は日本のおもしろさなのだということなのかもしれません。ただ、われわれは何となく感覚的に「そうですよね」という話になりやすいのだけれども、こういう話をアメリカ人にしても、もうきょとんとした顔をしていますよね。これをどうやって説明できるかという問題があるのだと思います。

松岡　オントロジー（存在論）的には、日本では世界の中心と個人を結びつけなかったということだと思うのですよ。一方、キリスト教やユダヤ教やフロンティア精神やプロテスタンティズムはまさにそれをやったから「勤労」という概念も生まれた。じゃあどういうふうに日本がしたかというと、「最初から世界の間である」というふうに見るんですね。それから、さらには河合隼雄さんも『中空構造 日本の深層』で書かれていましたけれども、中心には無というか仮のものしかないということです。

だから、中心軸を設定はするのだけれども、そこには、たとえば高木神（タカギノカミ）または高御産巣日神（タカミムスビノカミ）[31]のような何かを胚胎して、与えていくというよりも孕ませるオーガナイザーが漠

然といるという設定であるわけですね。一方、システムというのは本当はそんなに漠然としたものでは困るわけで、命令が下せる、デシジョンができるという機能が必要なのですが、そのために一神教的にはここはしっかりした絶対神が必要なわけですね。ところが日本ではその中心も仮の設定にした。たとえば、日本の天照大御神（アマテラスオオミカミ）[32]について、どういう神様なのか知っている日本人はほとんどいないと思いますよ。何となく恩寵があるのではないかとか、ありがたいこと、賢い方かもしれないとか思っているだけなのではないですか。

中心においてすら、こんな神しかいないのです。しかも神は一人ではなくて、むちゃくちゃたくさんいるわけですからね（笑）。

それからもうひとつは、さっきサービスとレシーブということを申し上げたのですが、提供する側がそのような、孕ませるというような、あるいはにじませるようなものが中心に仮にいる程度ですから、受ける側も、受けているのか、自分が生産しているのかが両義的なのですよ。つまり、絶対者や支配者に対して被支配者が対抗して頑張っているわけではなく、両義的なものが最初から主体としてあるのですね。もともと主体という考え方が両義的であること自体が非一神教的ですからわかりにくいのですけれども、しかしここをこそ世界に対してきちんと説明すべきだと思うのですね。日本における主体というものは元々両義的であって、レシーブであって同時にサービスでもあるのです。

他方、現在の英語においては、「サブジェクト」が主体としてあり、「オブジェクト」が客体（目的）として位置づけられていますが、もともと「オブジェクト」というのは、神と人との間でオブジェクションして（異論を唱えて）いるものだったわけですね。初期英語においては「サブジェクト」というのはこの奴隷の方だったわけですよ。それを西欧社会はひっくり返して使っているわけです。簡単に言えば、西洋人の中にもトリックがあるわけです。これをあばくというのもひとつの手ですね（笑）。

また8世紀までのキリスト教にはマリアなんていなかった。キリスト教ではもともとマリアなんて人物はいないのに、それをミトラ教[33]やエジプト神話のイシスから「マリア」というキャラクターを取ってきたわけでしょう。しかも、処女懐胎というような神話までつくってしまった。本当にすごい編集だと思います。だけれども、そのような編集はわれわれ日本人にもあったのです。あったけれども、最初から多神・多仏としてすべて切り捨てないで来た。日本人は、オブジェクトとサブジェクトとの、一神教的ではない連続したプロセスそのものを物語にし、道行きにし、狂言にもし、美意識にもしたのです。そこで、先ほどのキリスト教のように、あなた方西洋人だって同じような編集をやってきたのでしょうと、そういうことを言ってもよいのだと思います。

中谷　いや、そういうふうに言われると、ヨーロッパの人たちもひょっとしたらわかるかもしれないですね。というのは、キリスト教的な世界が一応表面上を覆っていますけれども、実際はその元にギリシャ神話とか、ゲルマン神話とか、いろいろなオリジナルがあったわけです。先ほど、日本人には三層構造があると言いましたけれども、彼らにも実はそのような複雑な構造があって、表面的にはキリスト教世界のロジックで生活しているけれども、深く行くと「ちょっと違うね」という話になるのですよね。ですから、そういう説明で、あなた方だって昔そうだったじゃないかという話をすると通じると思います。ただ、難問はアメリカ人ですね（笑）。

松岡　やはり気になりますか（笑）。

アメリカを卒業？

中谷　アメリカ人はそれぞれの文化を捨てて移民してきた人たちの集まりなので、文明とか文化はマターじゃないと考えているわけです。つまり、個別の文化や文明を乗り越えた普遍的なロジックだけで勝負するのだ

というのがアメリカ人の考え方ですね。

ですから、アメリカ人の普遍主義というのは、ヨーロッパから見ても「あの人たちは何を言っているのだろう」と本当に鼻持ちならないわけです。ロジックではなかなか勝てないのだけれども、その深層心理のところになると抵抗感が強くて、ヨーロッパ人でアメリカがいいと言っている人に、私は今まで一人も会ったことがないですね。

松岡　もうほっておきましょうよ、アメリカさんのことは（笑）。

中谷　ただ、経済学とか経営学の世界では、文化性とか文明とか歴史とか、そういう複雑なものを一切捨象したシンプルなロジックだけの世界ですべて説明しようとする体系を彼らはつくるので、ものすごくわかりやすいのです。だから、別に何もおいしくないのだけれども、コーラが世界中で飲まれるのと同じことですよ。

松岡　アメリカが生んだゲーム理論とかMBAのメソッドとか、どうしてこんなものが世界でやたらに受けるのだろうと、かつて研究してみてある部分は感心しました。しかし、唯一、決定的な問題がありました。それはすべてのロジックや意思表示に対してはベストレスポンスがあると思い込んでいる点なのです。つまり、すべてにベストレスポンスがあり得るとしてセオリービルディングしているのですね。でも、ベストレスポンスがあるはずだ、そしてベストレスポンスをしていないものは叩けばいいという、その大前提がそもそも間違っているのだと思います。実社会にはベストレスポンスなんてないですよ。金融取引だってあやしい。

だから、すべてのプレイヤーはベストレスポンスをするというこの大前提が、やはりアメリカがまだ「普遍性」の神話というものを信用し過ぎている象徴だなというふうに感じていて、これは崩せるなとは思っています。

太下　社会におけるレスポンスは多様であるということでしょうか。

松岡　そうです。多様だし、さらに言えばレスポンスかレスポンスではないかわからないこともあると思います。たとえば、日本語で「結構ですね」と言う場合、これはレスポンスしているようでいて、「もういい」と拒絶して結構と言っているのか、「ああ、いいですね」と受け入れて言っているのかわからないですよね。また、「その辺は適当にやりましょう」と言う場合、この「適当」って何だというと、これは実はレスポンスになっていないでしょう。こういうものでコミュニケーションを成り立たせている日本社会が現にあるのに、すべてのプレイヤーがベストレスポンスすべきだなんて訳のわからないことはあり得ないという逆襲も本当はしてもいいはずです。

太下　米ソ対立がなくなったことが、アメリカを増長させたのではないでしょうか。

中谷　そうですね。しかし、アメリカ人も、ようやく世界からどうにもならないと国と思われ始めているということに気づき始めたのではないでしょうか。

実際、アメリカは9.11以来、坂を転げ落ち始めたのではないかと思うのですよ。今、サブプライム問題がクローズアップされていますが、その前にエンロン事件があり、その後にはイラク戦争がありました。また、アメリカ社会を実際に見ていると、彼らはあまり議論したがらないけれども、格差の問題が厳然としてあります。肥満が異常に多いとか、健康保険に入れないために5人に1人が病気になっても医者にかかれないとか、とてつもないことがいろいろなところで起こっていて、世界からも、アメリカのモラルリーダーシップというのはもうなくなったねというふうに見られるようになった。21世紀に入ってからのアメリカは危機的な状態に陥り始めたのだと思います。大統領選挙で、もしもオバマ候補が大統領になったら、アメリカは西欧の国とは見なされなくなってくるのではないでしょうか。アメリカの求心力というのは西洋と一体化していたからあったので、もしこれが本当に多文化・多元主義の国というふうになったときに、世界の人はついていかない可能性がありますね。

松岡　そういう意味では、少なくともリーダーシップを持つ国とは見られないようになっていく可能性がありますね。

中谷　そうすると、アメリカ的な、一元的な普遍主義的な考え方に対する反省が起こってくるでしょう。地球温暖化問題についても、どうにもならないところまで来ているわけですね。そうすると、ちょっと外れたところに価値を見いだすような発想法がないと、この宇宙船地球号の中ではうまくやっていくということは不可能だと思うのですね。

　だから、拡張主義的な個人主義にも赤信号がともったし、アメリカ的なポリティックスのやり方というのもどうもおかしいし、次に来るのは、学問的に見てもアメリカ的な普遍主義、ロジックだけの世界では、真実を描写できないというふうになってくるのではないかというふうに思っているのですけれども。

松岡　私も最初に申し上げたように、オールアメリカンというとラテンアメリカも入っているわけですが、その半分がもう変わってきているので、オバマ候補もきっと多文化主義に向かっていくと思います。そして、確かに世界の覇権者としての地位は失うでしょうね。問題は、そうなったときに、アメリカの失墜は、まあ喜ばしいとしてもですね（笑）、日米同盟をどう考えるかという、日本の側の問題が生じますね。

中谷　お隣の中国もアメリカに劣らずしたたかで、日本としてもうかうかとはついていけない国ですからね。

太下　アメリカが覇権を失っていくと想定した場合、日本がアメリカを“卒業”するというこも考えられますね。その場合、21世紀の東アジアにおいては、日本と韓国との関係というものがとても重要なキーポイントになってくるのではないでしょうか。

松岡　なりますね。この前に、森山眞弓さんが会長をやっている「日韓女性親善協会」という会でキーノートスピーチをしてきたのですけれども、かつては百済と日本というのは混ざってネステッドだったわけなのに、白村江の戦いで敗れて以来、日本はシーレーンを見捨ててしまい、韓国とは1000年にわたって対馬の宗氏という一族を媒介にしてしか交流しなかったというツケがあるのだと思います。だから、もう一度そのツケを回収して、日韓関係というものを、負の時代の問題も含めて組み直さないといけないとスピーチしておきました。

中谷　その可能性はありますかね。韓国人から見て、日本は弟分だと見たいわけでしょう。

　それで、呉善花（オ・ソンファ）さんが言っておられるように、「日本は何をやってもけしからぬ」というふうな発想が韓国にはあると思うのですけれども、それは乗り越えられる溝でしょうか。

松岡　乗り越えられると思います。たしかに、韓国の「恨（ハン）」の文化というものと、日本の「恥」の文化は必ずしも相容れないと思います。それはそうなのですけれども、一方で、たとえば民藝の柳宗悦が発見した井戸茶碗のようなものを韓国人は発見できなかったわけですが、同様に、韓国人にはできて日本人にできないことも民衆の文化ではたくさんあると思います。ですから、この民衆的なレベルで日本と韓国の組み合わせ、さっきの太下さんの言葉を使えば「日韓コモンズ」みたいなものがもう少し日韓の民衆レベルで協働してつくられていく可能性は高いんじゃないでしょうか。

グローバリゼーションと苗代論

松岡　私は最近は「苗代論」ということを言い出しています。

　それは、グローバルスタンダードをすぐ受け入れないで、いったん苗代にして、そして田植えをし直すというイメージです。この幼弱ではあるかもしれないけれども、苗代という中間段階をつくるべきだという考え方です。では、アジアの農業は全部直まきなのに、なぜ日本はそんな苗代をつくったかというと、やはり四季があって、成長する時期にちょうど梅雨が来てという自然条件、それから斜面が多かったとか、水利が悪いとかいろいろなものがあったので、いったん苗代

という強いものをつくっておいて、それを一番いいところへそれを置く間に土壌をつくり直しておくというふうにした。この仕組みがすごかった。この苗代のようなことをもう一度考えるべきではないかというふうに思います。

中谷　その苗代論というのは、具体的には、どうイメージしたらいいのでしょうか。

松岡　今までのグローバリゼーションとは、日本的経営を全部輸出するとか、あるいは逆に全部欧米流のグローバリズムをまるまる輸入するとか、そのどっちかの両極をやってきたのだと思うのです。それで「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と褒められたこともあれば、全然だめだと言われたこともあるし、「ジャパン・ナッシング」というふうに無視もされたこともあった。でもそうじゃなくて、あらかじめレセプターをつくっておいて、土壌づくりをしておくのがいいと思うのですよ。田植えと苗との関係をつくり直していくというか、準備するというか、鍵と鍵穴の両方をつくることに切り換えるべきではないですかね。ただ、それは開拓者として、グリンゴ（よそ者）として向こうへ行ってダーッとやって、それでそこに日本的な商社や工場をつくるというやり方ではなくて、日本的な要素と現地の要素の両方をうまく組み合わせるというイメージです。

もちろん、その土地のリーダーと日本人がアソシエーションを組成するとか、いろいろな方法があると思うのですけれどもね。

中谷　そういうことができる前提は、グローバルに出かけていく人たちの自己認識の確かさなのではないでしょうか。自分たちは何なのだということをわかっていないと、その鍵穴をつくれないですね。

これは戦後教育のせいか何かわからないけれども、学歴もあり、グローバリゼーションの先兵になって働いている日本人たちが自分をしっかり把握できないから、何かわけがわからないようなところをさまよっているような気がしてならないのですね。

太下　これは今の大学教育に本当の意味でのリベラルアーツがないからなのでしょうか。

中谷　リベラルアーツというか、歴史、哲学、文明論、宗教学など、そういったところの基礎教育が全然ない。

松岡　そうですね。それから、英語一辺倒主義も危ないですね。

もちろん、全部を日本語とする必要もないのですよ。あるいは、すべてを現地語にする必要もなくて、英語と日本語と現地語、この3つをまぜて、新しいクレオールとして、新たな企業の言語リテラシーとして組み立てるべきです。それにはビジネスイングリッシュというものをビジネススクールで学ばなければいけないのと同じように、われわれ日本だって世界に向けて「ジャパン・コンセプト」をどんどん放出したっていいわけです。私は「あはれ」とか「あっぱれ」とか、そういう概念はもう翻訳するなと言っています。「はかどる」とか「はかなし」というものはもうそのまま使って組み合わせなさいということを言うわけです。そういうことをやっていかなければいけない。かつて日本は、万葉仮名のときにフォントがないのに、そういう新しい組み合わせをやったわけですから、そのぐらいの努力をもう一度やるべきではなでしょうかね。

中谷　そうですね。

新たな映像言語の誕生

太下　今、インターネットが、ものすごく高度に発達している時代となり、おそらく今の子供たちというのは私たちの時代などとは全然違って、小さいころから膨大な量の映像を自分で選択して見られる人類で初めての世代になるかなと思うのです。その場合、もしかしたら映像というものが新しい言語やコミュニケーションになり得るのかなというふうに思ったりしているのですね。松岡さんの書かれた本の中で、言語があって物語ができたわけではなくて、物語の編集の中で言語が出てきたのだという記述がありましたが、そのことを考えると、子供たちが映像を見て、勝手にサンプリングして新しい映像をクリエーションしていく過程で、

もしかしたら人類史上で初めて映像の言語というものができるのかもしれないと考えたことがあるのですけれども、いかがでしょうか。

松岡　十分に可能性はあると思います。イメージ・ロゴグラムみたいなものですね。そういうものはすでに、フラッシュ・アートとか、そういうレベルでは少し出てきていますし、漫画のようなものを簡単にPCでつくれるというようなことを見ていると、十分にあり得ると思うのです。

ただし、日本の漫画には、たとえばオノマトペ[34]をつくり出したとか、吹き出しのフォントをゴシックや明朝まじりにしたりとか、ルビを欠かさないとか、実は独特の工夫がいろいろとあるのです。このことから、新しい映像言語というものは今までの映像と言語が結びつくだけではだめで、やはりそこに何か創発、相転移が起こるようなものが生まれないとだめだろうと思いますね。

太下　たとえば、今、映像作品を借りようと思ってレンタルビデオ屋さんに行くと、映像の一応ジャンル分けはされていますね。ただ、そのジャンル分けというのはよくよく見るとたとえばアドベンチャーもの、恋愛ものとか、ストーリーのジャンルでしかなくて、実は映像表現そのものでの分類はなされていないのです。一方で、松岡さんが帯の言葉を書かれた『世界のサブカルチャー』[35]という書籍にも書かれていますけれども、あれだけ多様な表現が出てくると、もしかしたら映像そのものの分野というのが新しくでき得るかもしれないなと思うのですね。

松岡　できますね。

太下　そういうふうに考えていくと、ここに新たな言語が生まれてくる兆しが見えるのかなと思っているのですね。

松岡　そのためには、今言われたような映像文法上で価値や領域を分けたり、コミュニケーションのおもしろみを分けるような価値観や評価軸も同時に誕生していく必要がありますよね。

太下　映像を遊ぶいろいろなルールといいますか、まさにかつて、連歌の会で新しい表現が生まれたような、新しい場が映像分野でもできるかもしれないなと思うのですけれども。

松岡　はい。そして、この映像言語というものが、まあ映像言語と呼ぶかどうかはちょっと別として、こういう新しいものが誕生していくには、タブロー主義というものも一回考え直した方がいいのですね。西洋絵画から始まって、映画から、パワーポイントでプレゼンテーションをする場面も含めて、四角い表現、すなわちタブロー主義がすべてを牛耳っているわですが、その奥には西欧流のグローバリズムがあるわけなのですね。

しかし、映像というのは必ずしもタブローで出てこなくたって、スクロールしたっていいわけですね。また、巻物とか軸とか扇面とか屏風とか、ちょっと違う表現形式だってあるわけですね。だから、こういう表現形式についても日本人は新しい発想ができるはずなので、もっと大胆にやるといい。

太下　ちょっと話題はずれてしまうかもしれませんけれども、映像に関しては日本人は、たとえば西洋の映画を取り入れたときに活弁という新しい仕組みをつくりましたが、これは実は新しい表現形態ですね。

もともとの講談とか語りの文化と西洋の映像をうまく組み合わせて、それが見事に新しい文化としてつくられたわけなのですけれども。

松岡　そうです。東南アジアでも同じように活弁が生まれましたね。

太下　あのようなことがもっともっと映像を軸にできてくるとおもしろいチャレンジになるかなと思っているのです。

松岡　映像と言語と、あとやはりリズムと音楽ですね。たとえば、日本では絶対当たらないと思われていたラップが当たったことについて、MITのイアン・コードリーという研究者が「意外だ」と驚いているのです。だって、黒人の音楽が何で日本人にあんなにはやるのだ

と。ジャズはそこまではやったかと言えばはやっていないわけです。でもラップは黒人音楽だからはやっているのではなく、言語の単位としてはやるのですよ。また、「DA·YO·NE」[36]ではないのですけれども、ラップには途中に間投詞のようなものが膨大に入るわけですね。それからもうひとつは、日本語はオノマトペの量が世界一なわけです。これはオギュスタン・ベルク[37]も感心していて、「どんどん」と「とんとん」、「キラキラ」と「ギラギラ」など、濁音と清音を代えるだけで全く違った状況を説明できるようになっています。

太下　最近、『日本語オノマトペ辞典』[38]も出版されましたね。

松岡　出ていますよね。となると、今までわれわれは、ビジネスイングリッシュをたたき込まれ、あるいはオックスフォード流の論文の書き方というのも学ばされたのだけれども、そうではない、たとえば「ギラギラしたお仕事」とか、「とんとん拍子」というような表現自体がコミュニカティブになり得るとすれば、今の映像、言語、音楽、そして擬態、擬声というものを取り込んだような、新しいコミュニケーションツールの開発やソフトウェアというものを、日本のベンチャー企業等がもっとやった方がいいのではないでしょうかね。

太下　そうですね。そういう新しい領域にこそ日本の活路というか、チャレンジすべき方向性があるような気がしますね。

松岡　絶対あると思いますよ。そして、手塚治虫のような水準の若い者が、そうだな、30人ぐらい出現してくれば、その連中にちゃんと投資をしてあげるべきでしょうね。

中谷　そうですね。ロジックだけによるコミュニケーションよりも、もっと立体的なものになりますね。

松岡　なりますね。きっとそのときにちょっと壊したり、変更しなければいけないものがいくつかあって、先ほどのタブロー主義だとか、今のPCが持っているファイルのディレクトリのあり方とか、マトリックスという考え方とか、こういうものをちょっとずらしたり、変形したりする必要があると思うのですね。

仏教×量子力学

松岡　きょうはそういうお話はあまりできませんでしたが、私は最初に、科学が今ちょっと今ヤバイと申し上げたと思います。しかし、量子力学、相対性理論から複雑系までの科学というものが、実は日本のコンセプトに似ているということに今あらためて気がつくべきだと思うのですね。

太下　たとえば仏教の世界観と量子力学の関係とかですね。

松岡　そうです、そうです。それから、たとえば、老荘思想とカオスの縁の関係のようなものです。

　つまり、量子というのは点ですらないわけでしょう。それは波動であって、粒子であるわけですから、それは最も曖昧な世界ではないですか。それが物質の根本にあるのだから、それは実は日本の価値観そのものとどこか似ているんですよ。

太下　そうですね。それができると、日本人にとっては西洋の科学大系を読み直すと同時に日本人の文化的な背景をまた別の視点から読み返す、両方の価値が出てきますね。

松岡　そうですね。

中谷　今まで議論してきたようなことは、実は西洋でも先端を行っている人たちは気づいているのですね。

松岡　そうですね。アメリカでもカリフォルニアのバークレーあたりには、そういうおもしろい人間がまだいますよ。

中谷　そうですね。たぶん、量子力学が出てきたころから、決定論的な西洋の科学というものに対して疑問符がつけられて、そこから複雑系に進んできたのですけれども、実はその背後にあるのはやはり大きな世界観の転換かもしれないですね。確かに19世紀ぐらいまではアメリカ人も含め、ヨーロッパ人も確信に満ちていましたね。自分たちの考え方というのはいかに進歩的ですばらしいかということであったのだけれども、20

世紀になったら懐疑的になって、決定論的なことは何もないということがわかってきたと思うのですね。それに対してアメリカという国は決定論的な発想がまだ強いわけです。でも、そのアメリカが衰退トレンドに入ったとすると、結構、ここで議論してきたような世界というのは割と早く出現するかもしれないですね。ちょっと楽観的過ぎますかね。

松岡　そうありたいのですが、日本は科学と哲学と芸術をつなげる努力をしていませんからね。もうちょっと頑張った方がいいですね。

中谷　そうですね。一方で日本人が「構造改革」とか、改革しさえすればみんな幸せになれるのだとか、非常に単純なスローガンにだまされて、自分たちの足下を見る作業ができていないということが非常に大きな問題ですね。

松岡　だから、たとえば小選挙区制とか首都移転とか、今、固着しつつある社会システムを早めに再検討した方がいいのではないですかね。その中には日米安保も、教育の六・三・三制もみんな入ってくるでしょう。そして、すぐ実行できなくても、今のうちに組み合わせを変えるためのシナリオだけはつくっておいた方がいいと思います。私は、たとえば首都移転とか道州制とか、全部賛成なのですけれども、なぜかという理由をやはりそろそろつくるべきであって、それにはマスタープランもデュアル・スタンダードである方がいいと思います。天皇と幕府、公家と武家、東国と西国というふうなことも機能していたんですから。それには、道路整備を無理にしなくても実際の価値の移動が起こるとか、そういうような理由説明までちゃんとつけた首都移転や道州論や義務教育をどうするかというようなことまで考える社会文化論を期待したいですね。

太下　そうですね。実際に日本の歴史の中で首都移転を見ると、かつての日本は首都を移転することで時代の区切りをつくり、新しい時代をつくってきたわけですからね。

松岡　たとえば、福原京[39]を遷都と呼ぶかどうかとともかく、福原京において日宋貿易が開始されたという側面があるわけでしょう。

太下　ええ。新しい時代をつくるのだというその理由、コンセプトがあれば、たとえば首都を移転させることもいいわけですね。

松岡　今はその理由説明が足りないのではないですかね。難しそうだから、もうちょっと時間を見ようとか、やめてしまおうという感じでしょう。その間にやはり理由や根拠やシナリオを3つぐらいつくったっていいぐらいですね。

中谷　さあ、それではそろそろ時間が来ましたので、きょうは本当にありがとうございました。

太下　大変おもしろいお話を、どうもありがとうございました[40]。

【注】

1 イマニュエル・ウォーラステイン（Immanuel Wallerstein）：アメリカの社会学者・歴史学者。各国を独立した単位として扱うのではなく、より広範な「世界」という視座から近代世界の歴史を考察する「世界システム論」を提唱。

2 アルゼンチン、ウルグアイ、エクアドル、ガイアナ、コロンビア、スリナム、チリ、パラグアイ、ブラジル、ペルー、ベネズエラ、ボリビアの12ヶ国。

3 フーゴー・グロティウス（Hugo Grotius）：オランダの法学者・政治家で、「国際法の父」とも称される。

4 日本の宗教学者。思想史。前国際日本文化研究センター所長・名誉教授。主な著書に『日本文明とは何か』（角川書店、2004年）等。

5 フランツ・カフカ（Franz Kafka）：現在のチェコの作家。主な著書に『変身』（1915年）等。

6 マルセル・プルースト(Marcel Proust）：フランスの作家。主な著書に『失われた時を求めて』（1913年～1927年）等。

7 ジェイムズ・ジョイス（James Joyce）：アイルランドの作家。主な著書に『ユリシーズ』（1922年）等。

8 江戸時代に連歌師・西山宗因や井原西鶴らを中心にして栄えた俳諧の一派。

9 マルティン・ハイデガー（Martin Heidegger）：ドイツの哲学者。主な著書に『存在と時間』（1927年、未完）等。

10 エトムント・フッサール（Edmund Husserl）：オーストリアの哲学者。主な著書に『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（1937年）等。

11 ジャン=ポール・サルトル（Jean-Paul Sartre）：フランスの哲学者。主な著書に『方法の問題』（1960年）等。

[12] ホセ・オルテガ・イ・ガセト（José Ortega y Gasset）：スペインの哲学者。主な主著に『大衆の反逆』（1930年）等。
[13] デイヴィッド・リースマン（David Riesman）：アメリカの社会学者。主な著作に『孤独な群衆』（1950年）等。
[14] 日本の歴史学者。主に著書に『無縁・公界・楽――日本中世の自由と平和』（1978年／増補版、1987年・1996年）等。
[15] 中世日本において、朝廷に属し天皇・皇族などに山海の特産物などの食料や各種手工芸品などを貢納した集団。貢納物の原料採取・作業・交易をする場を求めて移動・遍歴することを必要としていたため、関銭・津料などの交通税を免除され、自由に諸国を往来できる権利を得ていたとされる。
[16] 神社に隷属し雑役などを行った下級神職・寄人のこと。神社に隷属した芸能者・手工業者・商人なども神人に加えられ、やがて、神人が組織する商工・芸能の座が多く結成されるようになったとされる。
[17] 江戸時代の大阪堂島が舞台の時代小説。著者は富樫倫太郎。
[18] 安土桃山時代〜江戸時代初期の絵師。
[19] 連歌や俳諧において、長句（五七五）と短句（七七）を（交互に）付け合わせる技法。
[20] アントニオ・ネグリ（Antonio Negri）：イタリアの哲学者。アメリカの思想家マイケル・ハートとの共著に『帝国』（2003年）および『マルチチュード』（2005年）あり。「マルチチュード」は、ラテン語で“多数”“民衆”などの意味。
[21] 池大雅（いけのたいが）：江戸時代の絵師。
[22] 長谷川等伯（はせがわとうはく）：前出（注18を参照）
[23] 浦上玉堂（うらがみぎょくどう）：江戸時代の絵師。
[24] 青木木米（あおきもくべい）：江戸時代の絵師。
[25] コリン・ウィルソン（Colin Wilson）：イギリスの小説家、評論家。主な著書に『アウトサイダー』（1956年）等。
[26] アルチュール・ランボー（Arthur Rimbaud）：19世紀のフランスの詩人。主な詩集に『地獄の季節』（1873年）等。シルヴェスター・スタローン主演のアクション映画のことではない。
[27] ヴァーツラフ・ニジンスキー（英語；Vaslav Nijinsky）：ロシアのバレエダンサー・振付師。
[28] 小堀遠州（こぼりえんしゅう）：江戸時代初期の武将。茶人、建築家、作庭家としても有名。
[29] 社会的な善悪の判断や賛成や反対の議論が錯綜したり対立したりしているとき、その社会がつくっている世界観が参照できる第三の超越者のようなものを想定すること。社会学者・大澤真幸の用語。
[30] 部分であるが全体としての性質も持ち、上下のヒエラルキーと調和・機能するという物の構造を表す概念。イギリスの哲学者アーサー・ケストラーが著作『機械の中の幽霊』（1967年）の中で提唱した概念。
[31] 日本神話の神。古事記では高御産巣日神（タカミムスビノカミ）、日本書紀では高皇産霊神（タカミムスビノカミ）と書かれる。葦原中津国平定・天孫降臨の際には高木神（タカギノカミ）という名で登場する。
[32] 日本神話の神。太陽を神格化した神。
[33] ミトラ教またはミトラス教（Mithraism）：ローマ帝国の領土において広範に流布した宗教。太陽神ミトラ（ミスラ）を主神とする。
[34] オノマトペ（英語：onomatopoeia）：擬声語（ぎせいご）。擬音語と擬態語の総称。状態や感情などの音を発しないものを字句で模倣するのは、日本語の特徴とされる。
[35] 『世界のサブカルチャー』（翔泳社、2008年）。著者は、どどいつ文庫伊藤、ばるぼら、福井康人、モモ、みち、タブロイド、屋根裏（監修）、タコシェ。
[36] 日本のヒップホップユニット「EAST END×YURI」（イーストエンド プラス ユリ）のデビュー・シングル（1994年８月発売）。ミリオンヒットを記録し、「英語以外のラップによるCD売り上げ記録」としてギネスブックにも掲載。
[37] オギュスタン・ベルク（Augustin Berque）：フランスの日本学者。主な著書に『風土の日本』（1992年）等。
[38] 『日本語オノマトペ辞典』小野正弘・著（小学館、2007年）
[39] 平安時代末期、平清盛の主導で造営が進められた日本の首都の通称。首都としての本格的な整備計画も持ち上がったが、結局実行されなかったとされる。場所は現在の神戸市付近。
[40] 今回の「編集長インタビュー」において、冒頭の松岡正剛氏の紹介文および注釈の作成にあたって、フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』から多くの情報を引用させていただいた。